

# 不透明体を通過する新光線の発見

東京醫事新誌 935:415-6,1896 (2月29日)

千八百九十六年(明治廿九年)一月六日伯林内科学会に於て「ヤストロウィツツ」氏は一新発見の報告をなせり。此発見にして尚進歩するときは今時の一新期限をなすものと謂ふべきものなり。此発見は純粹の理学的性質に属するものなれども、内科にも外科にも大なる關係を有せり。氏は其の一證として人手の写真を示せり。是れ實際生活せる人の手を写真せるものなれども、恰も骨格を写したるものの如く見えたりとぞ。消極管の為に空氣なき場所にて電流起る時の光線現象は誰も知る所なるが「ウエルツブルグ」大学教授「ロエントゲン」(Roentgen)は今茲に掲ぐる新発見者にして、氏は暗室に於て板紙にて消極管を覆い電流を解放するときは、白金「チアニユール」にて被いたるとき壁上に人の嘗て見ざりし所の光輝を映すことを見たり。氏は又此光線の他物体をも通過するを見出せり。即ち千「ページ」の厚き書籍、又は三仙迷の厚ある櫛の板をも通過し、充分薄きときは如何なる物体も全く通過せずということなし。物体愈々緻密なれば光線の通過愈々少なし。此理に由りて光線手の柔軟組織を通過し、写

真には唯骨格と二の金属指環とのみ現われたるなり。此光線の化学的性質を検したるに、此れにて写真を取り得べきことを知れり。而して写真器械と写真せんと欲する物体との間に閉鎖せる板戸あるとも能く物像を写真するを得べく、又物体を箱の内に蔵し置きて其の物体のみを写真することを得べし。又此新光線は反射の規則にも屈曲の法則にも従わず、屈曲せずして三稜鏡を通過し、又磁石の為に傾曲することなし。ロエントゲン氏は未だ其本性に適當なる名称与うること能わざるを以て、仮に「エッキス」光線と命名せり。而して氏は恐くは此光線は普通と異なる面内に在て振動するものならんと云えり。

\* 旧字体、旧かな使いは、新字体、新かな使いにあらため、句読点を追加した。